日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報　第12号
発行日　平成24年3月20日
事務局　日ポ・サロン
〒595-0041 泉大津市戎町6－10
TEL.0725-32-6328
FAX.0725-31-3747
E-mail:donkawai@pearl.ocn.ne.jp

クラコフ王宮

ポーランドを知る事は、実は日本並びに日本人を知るに繋がる。

ＮＰＯ法人　日ポ・サロン　理事長
澤　瀉　徹　郎

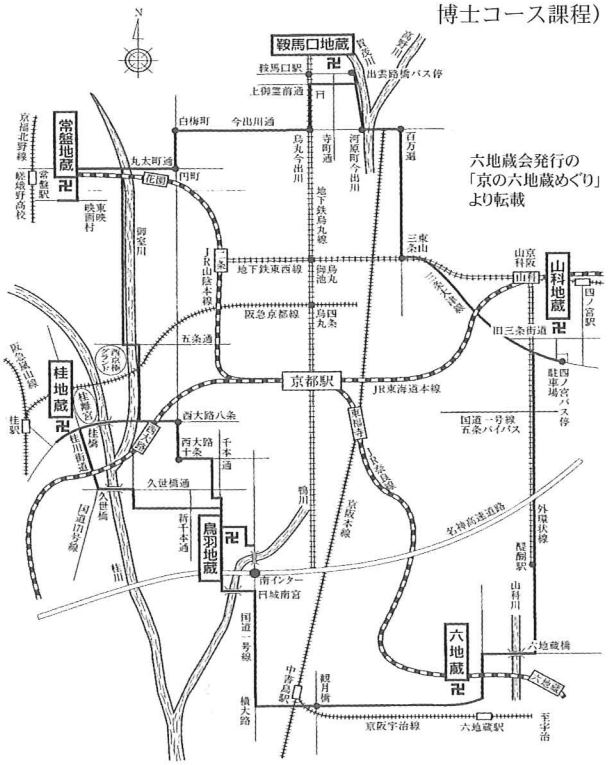
日頃は日ポ・サロンの活動に多大のご協力を賜り誠に有難うございます。
日ポ・サロンの活動も１２年目の活動に入り、今秋で連続第１０期生の留学生も実現し、送り先であるワルシャワ大学でも、大変高い評価を得ている事を会員一同喜びたく、同時に日頃の献身的なご協力に感謝申し上げます。
年初の事業計画も予定通り遂行出来たのも、会員皆様のご協力のお蔭と感謝致しております。
４月には春の嵐山散策に出かけ、世界遺産「天龍寺」では、管長様の楽しいお話を伺い、庭園の見事なしだれ桜に酔い、八方睨みの天井龍に驚き、美味しい食事を楽しみました。秋には「ポーランド料理と音楽を楽しむ」と銘打って、素晴らしい集いが出来ました。
東日本大震災では、ワルシャワ大学の学生達が即刻の対応で沢山の見舞いメッセージを寄せて頂き、感謝と驚きと感動を致しました。
日ポ・サロンの活動が両国の親善、文化交流に少しでもお役に立てれば大変嬉しい事です。
今後とも会員皆様の一層のご支援、ご協力、参画をくれぐれもよろしくお願い致します。

総　会　・　講　演　会

２０１１年１月３０日(土)
於/ＫＢＳ「桐の間」
会員３６名・留学生７名　出席

講演　京都探索「六地蔵巡り」

講師　マルチン　タタルチュク
（京都大学２０・２１世紀学現代文化研究博士コース課程）



「六地蔵巡り」（毎年８月２２・２３日）

・伏見六地蔵（奈良街道、大善寺）
・鳥羽地蔵（西国街道、浄禅寺）
・桂地蔵（丹波・山陰街道、地蔵寺）
・常盤地蔵（周山街道、源光寺）
・鞍馬口地蔵（鞍馬街道、上善寺）
・山科地蔵（東海道、徳林庵）

〈京の六地蔵〉

小野篁（おのたかむら）

漢詩人。木幡で桜の木で六体の地蔵を作り、一体づつ平安京の入口に置いた。

「嵐山・嵯峨野お花見散策」

２０１１年４月４日（月）
会員２９名・留学生３名参加

「嵐山、天龍寺、嵯峨野、お花見散策」

松　尾　暁　美

４月４日、日ポ・サロン２３年度のお花見に参加しました。３人の留学生を含め参加者は全員で３２名でした。

阪急嵐山駅に集合、すっきり晴れ渡った青空のもと渡月橋を渡り大堰川の岸辺を亀山公園まで歩きました。開花の遅れを心配していた桜もうれしいことに６，７分くらい咲いていました。亀山公園から竹林の小径、静けさの小道を抜けて野々宮神社へ、そこで折り返して目的の天龍寺には、北門より入山しました。境内では、色鮮やかな三つ葉のつつじや、多宝塔あたりの立派な枝垂桜がみごとでしたが、拝観の予約時刻が迫っておりゆっくりと鑑賞できなかったのは今も心残りです。

特別拝観では、まず書院にてお茶をよばれ、総長様のご挨拶のあと、留学生には英訳版の立派な天龍寺解説本を、私達にはお寺のバッジを頂戴しました。その後、案内役のお坊様に導かれて方丈に移り、回り廊下に腰を下ろして前に広がる堂々たる庭を眺めながらお寺の説明を聞きました。左の嵐山右の愛宕山を借景にして中央に石組みの滝を配した曹源池には、折りしもひとつがいの白鷺が飛来して舞い降り、池の鯉も大きく跳ねたりして、厳粛な雰囲気の庭を優美でのどやかに見せてくれました。

お坊様のお話は対話を交えながらの堅苦しくないものでしたが、その中で印象に残っているのは以下のようなことです。

天龍寺は足利尊氏が、夢窓国師の進言により、敵であった後醍醐天皇の菩提を弔うことによって後世に遺恨を残さず、争いごとのない平和な世を願って建立したものであること。

美しい庭園は、よい環境で座禅を組むため禅寺には必要なものであるということ。この方丈では今も毎夜９時から２時間、座禅が行われているそうです。その日は春とはいえ、風がことのほか冷たく、寒さに気もそぞろで聴いていた私は、冬の夜の寒さは如何ばかりかとお坊様たちの忍耐強さに敬服しました。

最後は法堂に移動し、加山又造の力作「雲竜図」の眺め方を教えて頂きました。天井に描かれた竜の目を見ながら、絵の縁取りの下を１８０度動いてみると、こちらの位置が変わっても天井に描かれている竜が向きを変え、顔の形も変えて自分についてくるという不思議な感覚を体験しました。

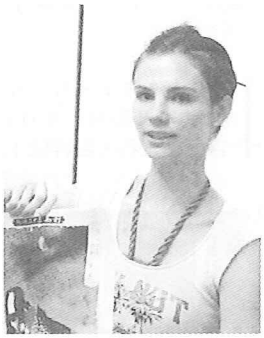
以上、吉本調の語り口でわかりやすく説明してくださったお坊様の話では、私達はＶＩＰ待遇だったとか。天龍寺の管長様と日ポ会員の橋本様のご厚情によってこのような特別拝観をしていただけたそうです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

昼食は大堰川沿いの老舗「花の家」にて京料理のお弁当を頂き、食後は震災に関する話などして閉会になりました。解散後、希望者のみで広沢池の傍にある佐野藤右衛門さんの桜園を訪れ、多種多様の桜を見学して別れました。

東日本大震災によって大勢の人や町が流され、原発事故には解決のめどが立たず、日本中が意気消沈している時期の催しではありましたが、美しい古都京都を留学生の方達と一緒に散策し、京都の良さを再認識するとともに日本人の誇りを少し取り戻せたお花見でした。

マルタさん送別会

２０１１年８月３０日（火）
ＫＢＳにて
会員２３名　留学生４名出席



今日、最後のスピーチですので、私の研究と少し日本での生活経験についてお話したいと思います。

前回のスピーチでも話しましたが、日ポ・サロンの皆さんのおかげで、日本に来て、専門の研究をすすめることができて非常に感謝しています。

留学している間、月岡芳年などの芸術家を中心とした私が専門としている江戸、明治時代の浮世絵の木版画を研究して修士論文を書くために必要な資料を探していました。私にとって特に大事なのは、ポーランドには全くない必要な資料が見つかったことです。

私の一番興味を持っている月岡芳年という浮世絵師についての情報は日本でも珍しいものですが、大学の図書館や美術館、本屋などで専門書と記事を手に入れました。また、木版画史、江戸、明治時代の浮世絵に関連した資料も集めることが出来て大変嬉しいです。

前にどうして浮世絵に関心を持っているのかを説明しましたが今日は私が一番興味のある月岡芳年について少し話したいと思います。どうしてこの作家の作品がこんなに好きになったか、初めはよくわかりませんでしたが、彼の木版画を見たとき、きれいで面白いと大きな感動を覚えました。後に、少し研究を進めたときに、芳年の生涯と芸術の独特性に気づきました。

まず、この芸術家の伝記から始めたいと思います。月岡芳年は大蘇（たいそう）芳年とも呼ばれています。１８３６年に江戸で生まれて、１２歳で有名な浮世絵師の一人であった歌川国芳に入門しました。その当時、絵を描く勉強の方法は、先生の作品を模写することでした。ですから、国芳の弟子として、芳年は先生の絵を模写して絵を習っていました。その結果として特に芳年の初期の作品には、国芳の技術・スタイルに強い影響が見られます。同じ人物のポーズ、体の細部の描き方、顔の表現、同じ構成が見受けられます。１５歳の時、芳年の処女作が出版されました。これは平家物語の場面を描く、国芳の専門の武者絵でした。その絵では、芳年の先生の描き方の特徴がまだよく見受けられます。でも、時が経過するにつれて、芳年は自分の独特なスタイルを確立し、画風が大きく変化しました。この大きな変化により、落合芳幾や河鍋暁斎などという画家と一緒に明治期を代表する浮世絵師になりました。

国芳の死後、芳年は貧乏で多くの困難に遭っていました。その当時、浮世絵が人気をだんだん落としていたのに、彼自身の粘り強さと才能のおかげで、１８８４年に芳年は版元と売り手によって『全国で一番人気のある浮世絵の画家』と呼ばれて、浮世絵師として高い位置を得てきました。芳年はようやく成功して、経済的な安定も得ることができました。生前にも彼の作品に多くの人が共感し、多くの弟子を取ることになりました。彼の弟子の中には、一番有名なのは口絵を専門にした水野年方でした。芳年は長時間、何度も精神病にかかっていて、ついにこの病で倒れて、１８９２年に５６歳で亡くなりました。

芳年がこんなに面白いと思うのはなぜでしょうか。それにはいくつかの理由があります。第一に、私が集めた資料で芳年はよく

“最後の浮世絵師”と呼ばれています。同時に多くの専門家によって、芳年の先生である歌川国芳は“最後の浮世絵師”として認められているのが本当ですが、（いつも専門家によって意見が違います）、ともかく、月岡芳年と同時に生きている絵師と彼の後の絵師は誰も“最後の浮世絵師”と呼ばれていませんから、芳年こそは最後の大事な浮世絵師と言えるのだと思います。

“最後の浮世絵師”と呼ばれているのは、どうしてそんなに大事なのかというと、一つ目は、江戸時代初期の浮世絵と江戸の変わり目に作った浮世絵が全然違うからです。江戸時代の時、白黒簡単な絵から、暈しがある多色の錦絵まで、木版画の技術が発展してきました。木版画の技術の進歩とともに、木版画の質が高くなりました。　その他、芳年の時代で海外から顔料を輸入し始めて、新しい色が現れていました。そして、もっといい道具と発展した技術のおかげで、彫師は絵師の下絵の細部を全て彫って絵師のデザインを忠実に模写するようになりました。つまり、最初の浮世絵と評される作品と比較した際、　（喜多川歌麿とも比べると）芳年の作品は色彩と質の面から優れています。

また、江戸時代の浮世絵はよく遠近法があまりなくて（ある場合、よく正しくないのです）、そしてキアロスクーロもあまり無いから、その結果として、立体感をほとんど持っていません。芳年の場合、少しずつ絵のルールを直して、最後のシリーズでは、彼の技術が発展してきて、ヨーロッパの作品と同じように、明暗のコントラストと遠近法が正しく描くようになりました。まだ木版画の特徴の輪郭の強い線がもちろん見られるが、前の浮世絵より、芳年の作品は立体感を持っていて、もっと写実になりました。

つまり“最後の浮世絵師”としての芳年は、発展された木版画の技術が与える可能性を使うことができました。芳年の作品では美術としての浮世絵の達成を全て見られます。

芳年が面白いと思う二つ目の理由もあります。芳年は明治時代になったら、時代精神に対して、伝統的な芸術を続いていて、神話、説話、歴史的な英雄を描くことにしたということです。あの時、明治維新の日本では、文化的ギャップを埋めるように、西洋化と近代化に向けて努力がされていました。その時、日本の美術の将来は洋画など西洋風の絵画だと考えられていました。浮世絵は人気をだんだん落としていたという時代でした。それにもかかわらず芳年は伝統を大切に思っていて、彼の才能は生前にも認められて人気のある芸術家になることができました。

前に言ったように、芳年は浮世絵の伝統に従って、自分の木版画の課題として普通の浮世絵のテーマを選んでいました。「武者絵の国芳」と呼ばれていた先生から絵を学んだから、芳年は忠臣蔵などの武者絵から始めました。後で美人画、風景画、同時代の事件を描く写実的な歴史画を制作するようになりました。そして江戸時代末期に人気になった残酷な事件と怪談から取った課題を描き始めました。このようなモチーフを特に上手く描きました。その理由で、彼は『血まみれ芳年』とも呼ばれています。

でも、彼の一番よく知られている作品は怪談と伝説のモチーフを描く絵なのです。芳年の作品の中で私が一番面白く思っているのは「和漢百物語」、「新形三十六怪撰」、と最後、ちょうど死ぬ直前に終わった「月百姿」という怪談、日本の神話や歴史的な英雄を示している、この３つのシリーズです。私の修士論文で、芳年の怪談からとったモチーフの描き方を研究したいと思います。

芳年のスタイルの特徴についても少し話したいと思います。一つ目に、芳年は非常にうまく登場人物の動きを描写することができました。彼の作品で見られる人物がよく跳んで、戦って、動作中で描かれています。又、専門家は芳年の絵で示した感情を主張するために、強い色をよく使ったのを指摘しています。そして伝説などから取った伝統的なモチーフを新しい前の浮世絵より、感情的な、心理的な方法で描きました。芳年にとっては直接に怖い内容を見せるより、不思議な雰囲気を作ることが一番大事なことだったそうです。絵の題材にした話の最高到達点・終わりの場面を描いている前の浮世絵師と違って、芳年はよく一番大事な場面の直前の瞬間を描きました。そうすると、一番残酷、醜いことを見せず、緊張だけを強めています。

私は芳年が残酷、血まみれ絵を描いていたという意見をよく聞いています。もちろん芳年は、そのような作品も制作しましたが第一にそのような絵は彼の全ての作品の中で、小さい部分だけ占めています。第二に、同じ残酷なテーマを描く、葛飾北斎や国芳などの木版画と比べると、芳年の絵はより残酷ではないと分かります。芳年の絵はふさわしい重い雰囲気があって、私たちをもっと感動させるかもしれません。でも、正直に言えば、彼の最後のシリーズで残酷や怖いことを避けようとして、伝統的な怪談を新しく解釈しました。

それをよくわかるように、一つの例を挙げたいと思います。
みなさんは四谷怪談のお岩という人物を知っていると思います。このモチーフは江戸時代の浮世絵師がよく描写しました。いつもお岩は、夫の毒にあたって、結果として奇形した顔で、他の人物を怖がらせる幽霊として描かれていました。でも、月岡芳年のお岩は、普通生活をしている美しい女の人として描かれています。明るい色と彼女の美しさの対照として、将来に起こる悪いことの前兆の、蛇の形になった狭い布が描かれて、芳年は不安の雰囲気を感じさせます。これは全然残酷だといえないと思います。逆に芳年はそのように、よく怖い話の一番残酷な内容を見せなかったのです。

浮世絵の専門家が芳年を研究し始めたのは、１９６０年頃でした。ですから、資料がまだ少なく、たくさんの分野の研究が進められる余地があると思います。帰国したら芳年の怪談の解釈を中心にして卒業論文を書こうと思っています。

この半年には、研究だけでなく、色々なことをして、充実した時間を過ごしました。日本学科の学生の私にとって特に貴重な体験は、日本の伝統を感じることができたということです。日ポ・サロンの方々に誘っていただいて、文楽、歌舞伎、花見、おみずとり、田植え、祇園と天神祭りなどを経験しました。さらに、能演劇、大文字、夏の花火も見ました。日本の家庭料理と色々な場所からの名物を食べてみて茶会にも参加しました。広島と宮島、倉敷、奈良、何度も京都を見物して旅行しました。新幹線から、１８切符など、様々な旅行の仕方がわかるようになって、数えられないほど多くの経験をする機会があって本当に嬉しいです。

日本に来る前に私が少し緊張して心配していた時、私を安心させるように、日本学科の友達の一人は、彼女にとっては日本での留学することが一番楽しい時間だったと言いました。今、私はこの一年間の私の日本生活を見れば、同じことを言えると思っています。みなさんのご支援、ご協力に感謝しています。これからもよろしくお願いいたします。

（マルタ・ヤクボフスカ）

ポーランドの集い
～ポーランド料理と音楽の集い～

２０１１年１０月２６日(水)
於/ホテル阪神　１０Ｆ　クリスタルルーム
会員３５名・お客様１７名　留学生２名　計５４名参加

参加寄稿

山　内　寿　美

その日、ホテル阪神のメイン会場は、あふれんばかりの人達で華やいでいた。「ポーランド料理と音楽の集い」と銘打った晴れの日である。

ポーランドは、ショパンの生まれた国だということは誰でも知っているが、具体的にその国の料理を味わえるという企画は魅力的だ。わくわくしながら席につく。“オマール海老と帆立貝ノカルディナル風、バルシチ、ビゴス、ＥＴＣ･･･”とポーランド語のメニューが添えられている。いつしか、かの国を旅した思い出が甦り広大な自然の風景を想う。

あの国の産物が、今ここで料理されて味わえるというのは嬉しい。コックさんたち、さぞや大変だったろう。総じて西洋料理のあの脂っこさとはひと味違って、旨味優先という印象が強かった。日本人の口に優しい味であった。

それにしても何と盛大な温かいパーティーだろう。チェロとピアノでショパンをふんだんに弾き語ってくださり、会場は感動と愉悦に湧き立ち、人々は互いに目と目で挨拶を交し合ったのであった。

そもそも、「日ポ・サロン」というユニークな名称が定着してもう１０年になる。

日本語を学ぶポーランドの学生を支援しようという運動から起こった名称だ。この間、中心になってこの会を支えてくださっている方々の真摯な愛の姿勢には感謝の言葉もない。
様々のイベントに参加させて頂いて、お友だちがふえていった。それらがお互いに地下水のように脈々と流れ入り、今日の盛況を迎えるに至ったのであろう。ポーランドについ関心を深め、こんなにたくさんの方々と語り合えるなんて。

私は心に一杯花束を抱えた気分になって、皆さんと共に幸せなこの雰囲気にひたっていたのであった。

素敵な人達との出会い

山口高弘

河合さんとのご縁で「ポーランド料理とショパンの会」に参加させていただきました。もともと音楽好きというのもありましたが、高校の同窓会館で開催されている同好会風のパソコン教室のお仲間である河合先輩のポーランド旅行映写が楽しみだったからです。お忙しい中、短時間で要領よくパワーポイントをマスターされた過程も拝見していました。

“夜目、遠目、傘の内”と言う言葉がありますが河合さんの場合には当てはまりません。例えば、教室のティータイムで日ポ・サロンについてのお話等をなさっている時の笑顔、或いは、その為にＰＣに向かっておられる時の真剣な眼差しとにかく生き生きと輝いていらしてお美しい。同時にそれを支える逞しい精神力をもお持ちなのだと思います。

河合さんのみならず、会の運営に携わっていらっしゃる他の皆様の日常も、また夫々の形でとても素敵なものに違いないと想像させていただきました。

バランスのとれたこの日の会の企画や諸準備、初参加の私達をもすんなりと導いて下さったご挨拶、分かり易く万事スムーズに会を運ばれた名司会、ポーランド料理のエッセンスのホテル側への伝達、テーブルでご一緒の方との楽しい語らい・・・。

着席した場所ではピアノの屋根から跳ね返ってくる響きを体感し、チェロでは弦と弓や指との軋みまで身近に聴くこともできました。それにアガタさんとアンナさん、きちんとした日本語で上手にお話しされましたね。帰りがけ家内がアンナさんと何やら立ち話。ポーランドの方との初めての会話に大いにご機嫌でした。遠い国からの留学生は、学んでおられる時点から既に日々親善大使的な役目も担っていらっしゃりさらに帰国後は両国の学問文化の交流、相互理解の軸となられる訳で、成程それに相応しい方々だなとの感も強く受けました。この日お会いできた素敵な皆様のご健勝と貴会の益々のご発展を心よりお祈り致します。有難うございました。

ポーランド料理と音楽の集いに参加して

澤潟久方

ポーランド料理のレストランは日本に１軒もないけれど、ホテル阪神の料理長が日ポ・サロンのためにレシピを調査し特別に取り寄せた材料を使ってご馳走していただけるとのご案内を澤潟理事長様からいただき、家内と二人で参加しました。

第１部の「ポーランド料理を楽しもう」では、ビーフの味が濃縮されたスープの“バルシチ”と、色々な野菜と肉をじっくり煮込んだ“ビゴス”に、ジャガイモ、玉ねぎ、卵などで焼き上げられた“プラッキ”と合わせて、じっくり味わいながらいただきました。最後にケシの実を使った“マコーヴィエッツケーキ”にデミコーヒーが添えられて、お腹がすっきりと納まりました。初めていただくポーランド料理は大地の恵みがいっぱいのボリュームたっぷりで、満腹になってしまいました。貴重な経験をさせていただきました。

第２部では、ワルシャワ、クラクフなど訪れたことのないポーランドの観光地やワルシャワ大学などの写真を分かりやすい解説を加えてご紹介いただき、ポーランドと日本の交流を深める事業の企図がよく伝わってきました。私もいつかはポーランドを訪ねてみたいと思っています。

ミニ・コンサートでは、ピアノの南なほきさんとチェロの池村佳子さんの素晴らしい演奏でショパンとタンスマンの作品を聴かせていただきました。最初に演奏された「２４のプレリュード」より選ばれた第１５番　変ニ長調（雨だれ）は私の大好きな曲です。　抒情詩を思わせるこの作品の不思議な魅力を再認識させていただきました。ピアノの詩人と呼ばれたショパンは、演奏について“音楽は歌であり、ピアノは指を使って歌わねばならない”と提唱したと伝えられています。そのことを端的に表した曲が「バラード第４番　ヘ短調作品５２」で、その魅力あふれるメロディーの美しさに魅了されてしまいました。最後に演奏されたチェロとピアノによる「序奏と華麗なポロネーズ　ハ長調」では、お二人の息がぴったりと合っていて、ポーランドの舞曲を髣髴とさせる演奏を充分に楽しませていただきました。

日ポ・サロンの支援事業でポーランドから神戸大学に留学中のお二人からご挨拶がありましたが、達者な日本語でのスピーチに関心しました。日本に到着したばかりのアンナさんは、ご両親から日ポ・サロンの皆様への挨拶の言葉を伝えられ、日本的な発想を身につけて留学して来られていることがよくわかりました。ワルシャワ大学日本学科の日本文化研究レベルの高さが示されたと感じました。

ポーランドからの留学生支援事業を通じて、両国の文化交流を図ることは極めて有意義な事業だと思います。これからもこのような会合、講演会、コンサートなどに参加させていただき、ポーランドへの理解を深め、両国親善・文化交流に協力させていただきたいと思います。

私の日本での生活

アンナ・ヴィエジビツカ
（神戸大学　国際文化学部）

皆さん、こんにちは。アンナと申します。今年の日ポ・サロンにサポートしてもらってる留学生です。皆さんのおかげで留学できるようになってありがとうございます。

私はもう半年ぐらい神戸大学で勉強しています。私の専攻は日本文化で、特に日本演劇に興味を持っています。学士で歌舞伎について論文を書きましたが、今、修士課程で明治時代の新派劇を研究しています。新派劇は伝統的な歌舞伎と西洋演劇を結合されて、素人の俳優たちに演じられたものでした。演劇学者によくあまり価値のない演劇だと思われていますが、私は先駆の現象として非常に面白いと思います。残念ながら、もう見られなくなった演劇です。

私の専攻研究の他には、日本語の勉強に集中しています。将来はポーランドにある日本企業に勤めたいですから、留学の時、出来るだけ上手になりたいです。日本語は、特に漢字は難しいですが、一所懸命に頑張りたいと思います。しかし、留学ということは勉強だけではないと思います。日常生活の場合、私は毎日新しいことを経験しています。世界中の留学生の友達ができまして、日本だけでなく、色々な国の文化についても面白いことがたくさんわかりました。友達と一緒に紅葉や梅の満開などを見に行きましたが、今、一番有名な桜を楽しみにしています。

私はこのような楽しい生活を送るのはありがたいことだとよくわかります。このことを諒として、そんなに運がよくない人に出来る限り手伝いたいと思います。そのため、留学している間にチャリティーをしようとしました。ポーランドでは毎年１月頃、１年で最も大きいチャリティーを行っています。クリスマス・チャリティーのオーケストラと言います。ある日曜日にボランティアたちが全国で募金箱をもってお金を集めます。政治家やセレブや有名なスポーツマンなどが寄付してくれたものが競売されています。今年は、集ったお金は、未熟児の弱い命を救うために使われることになっています。私もこのチャリティーを応援したかったのですから、私が通ってる六甲教会と日ポ・サロンの総会でバザーをしました。ポーランドの色々なお土産を売りました。全部で４万６千円が集りました。

皆さんの応援していただいて、ありがとうございます！
それでは、あと半年よろしくお願いいたします。

NHKラジオ深夜便「明日へのことば」出演依頼を受けて

澤　潟　徹　郎

日ポ・サロンは日本とポーランドの草の根交流として１２年に及ぶ実績を持ち、留学生も今年で１０期生１０人目の受け入れが実現し、送り先であるワルシャワ大学からも大変な評価を得ております。

９月５日付日本経済新聞全国版に「ポーランド学生支援・留学生から日本を学ぶ」と題して「街かど・人物館」に取上げられ、その記事がきっかけとなり、今回、はからずもＮＨＫラジオ第１放送「ラジオ深夜便」の中での単独インタビューを受ける事となり、その放送の一部をお知らせして、皆様のご理解と今後のご協力を頂ければ嬉しいです。

番組名 ： NHKラジオ第一　「ラジオ深夜便」の中での単独インタビュー
「明日へのことば」 ～留学生の日本の"親父"として～
放送日 ： 2011年　11月14日(月)　午前4時　05分

東欧の遠い国　ポーランドと日本の歴史的友好、親日の原点・史実について

ロシア革命後の混乱から、厳冬のシベリアで祖国に帰れないポーランド人が飢えと寒さの中、悲惨な状態に追い込まれた時、全世界へ向けて人道的支援救済要請に、いち早く応じたのが唯一日本政府だった。即刻１９２０年から７５６人の子供たちを日本赤十字社が受け入れ、裸足で服はボロボロの上、皮膚病などに悩まされていた子供達を手厚く看護し、祖国に送り届けた史実があり、既に９０年余が過ぎ、世代は代わっていますがその史実はポーランド国内で親から子供、孫にまで語り継がれ、今日、親日の原点となり、架け橋となっています。

その後、第二次大戦によるワルシャワ市街の壊滅的状況からして存命者はいないと思われていましたが、２００２年天皇・皇后両陛下ポーランドご訪問の際、出会いが実現した。大変高齢ながら「日本の善意に是非お礼を述べたい」との申し出から招待を受け両陛下との出会いが実現した。「モシモシ亀よ・・・」と懐かしそうに口ずさんだ瞬間は感動的であった。

ＮＰＯ法人　日ポ・サロン活動１２年のあゆみ

１９９９年９月に当時の大変熱心にポーランドを思う方々により、文化交流支援を目的として日ポ・サロン設立、発足しましたが、当時東欧の遠い国ポーランドを知る人は大変少なく「０から１までの距離は、１から１０までの距離より遠し」の如く大変でした。しかし、献身的で地道な努力が実り念願の留学生招聘が２００２年には早くも実現し第一期生となった。

２００３年には、ＮＰＯ法人の認定を受け、法人格を有することで社会的地位を確立した。ボランティア活動による社会的貢献活動の健全な発展を促進し、日本とポーランド両国相互の留学生への支援と文化交流の機会がより多く提供出来れば嬉しいです。

送り先であるワルシャワ大学でも、大変な評価を得ていることに会員一同喜びたく思います。

ＮＰＯ法人　日ポ・サロンの今後の指針について

ポーランドは気高い国・優しさの国・ショパンの国・愛国心の国・親日の国。私達の草の根交流１２年の歩み、継続の力が一人でも多くの方々に広まり、東欧の遠い国ポーランドで親日家が増え、また日本でポーランドへの関心が深まればこれほど嬉しいことはありません。「ポーランドを知ることは、実は日本並びに日本人を知ることに繋がる」

“がんばれ日本”　ＣＤについて

在大阪ポーランド共和国名誉総領事
高　島　和　子

印象的に日本語で赤く書かれたこのＣＤには、２０１１年３月１１日に起きた東日本大震災で被災し、亡くなった人々に哀悼の意を捧げると共に、とりわけ一瞬の間に両親をはじめ、兄弟や友人や家や本やおもちゃなどを失った子供たちに心を寄せないポーランド人はいない、と熱いメッセージが書かれています。

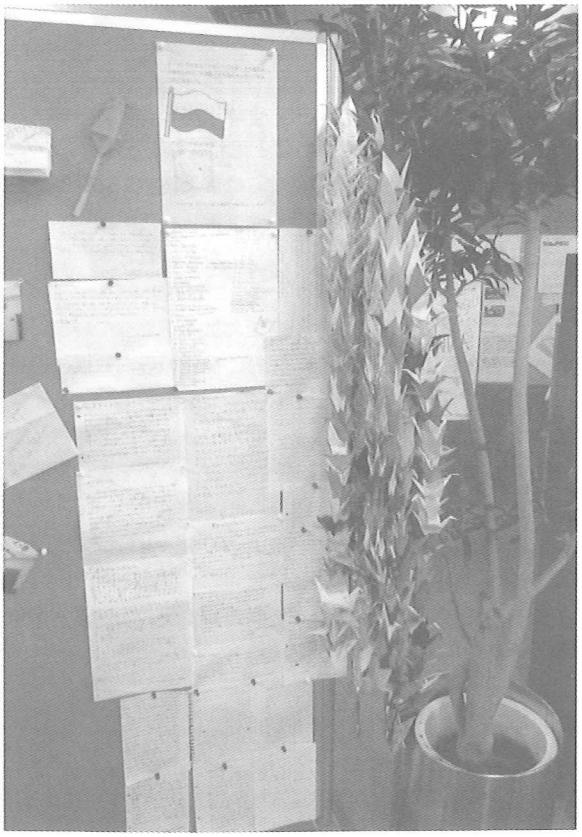
ラジオ３番トロイカの呼びかけに、コモロフスキ大統領が賛同を示し大統領府をはじめ、ポーランド国内各企業が支援協賛し、各マスコミ・新聞・テレビがコマーシャルを無料で行うなど一致して応援し、現在ヒットチャート１位を連続しています。

ショパンコンクールの優勝者、クリスチャン・ツメルマン、ラハウ・ブレハッチをはじめ、映画「ショパン」のヤヌシュ・オレイニチャックやバルバラ・ヘッセブコフスカ、アダム・ハラシェヴィッチ、ピヨートル・パレツィネ、エヴァ・ポブゥウォツカなど著名な入賞者が演奏し、提供曲の印税を全額寄付しています。とりわけ日本人にファンの多いラハウ・ブレハッチからは４曲も提供されています。

ポーランドからの熱い心に賛同してお買い上げ頂きましたことに感謝申し上げ、売上金は全額寄付されますことをご報告致します。ありがとうございました。

東日本の被災地へ

ワルシャワ大学日本学科の先生・学生の皆様から届いた千羽鶴と励まし・お見舞いのメッセージ



仙台国際交流センターに展示されました

東北のみなさんへ

パヴェル（波辺宇）

ぼくはパヴェルと言います。日本学科の学生（２年生）で、ポーランド人です。日本にすごく興味があります。文化とか言語とか。地震とつなみについて情報を聞いたらたいへん驚きました。心配してテレビを毎日見ています。
東北のみなさん、がんばってくださいね！みなさんはきっとはやく元気になりますよ!!

マルツェリ・クムル

私はポーランドのワルシャワの日本学科の２年生です。昔から日本に興味がありました。初めの聞いた時から日本語を実に大好きになりました。このひげきを気の毒に思います。考えられないほど恐ろしい地震でした。だがあきらめないでください。希望の光がかならずあります。いつか元の生活に戻るはずです。東北のみなさんがんばって下さい。お元気で。

パウリナ・マヒニク

私はポーランドで住んでいる日本学科の４年生です。ポーランド人は日本における大地震に強く心を打たれました。地震についてニュースをテレビで見てショックになりました。この大災害は大きな被害を起こしたから、みんながんばってください。世界中では人々はみんなの勇気や強さに感銘を与えました。元気をなくさないでください。

パヴェウ

私はパヴェウで日本学科の大学生（３年生）です。さいきんニュースから地震と津波のことを聞きました。それはひどいと思いますが日本人を信じています。家の改築を頑張って下さい！元気に生きて下さい！皆は日本人の能力を信じているからまもなく家族と家へ帰るでしょう。心配しないで下さい。日本人は強くて勇気がある国民だから今諦めてはいけません。他の国は日本の調子が分かるから手伝いしたがっています。私の友達も「日本人ははやく全部直す」と言いました。はやく元気になって下さい。頑張って。

チェルカフスキ・シモン（思文）

こちら、ポーランド人のシモンです。ワルシャワ大学の日本学科の学生（３年生）です。数年から日本に興味があります。大震災が起きたと聞いてとても心配しました。テレビに津波を見て、苦しい気持ちが出てきました。その事件は全く酷いことです。しかし、日本人がもう一度全世界を驚かせたと思います。地震があっても、津波が来ても原子力発電所の事件が起きても、国民は全て安心したように見えます。邪魔をしなくて、働き続けることは私にとってすごいことです。大和魂はいつもとても強い。だから一生懸命に頑張ります。今の生活たくさん人にとってとても辛いけれど、　再建は必ずすぐ仕上がってみなは常態に戻ると信じます。もう一度頑張って気をつけてください。

コレンダ・ドミニック

僕はポーランドに住んでいてワルシャワ大学の日本学科の学生です（４年生）。金曜日、朝に起きるとテレビで恐ろしいニュースを見てしまいました。最初は地震の震央が海にあるとあると聞いて大丈夫と思ったんですけど、津波もあると知るようになりました。

週末の時にテレビとラジオがない所に行って、出掛ける前に被害者が30人ぐらいでした。「日本人は救助隊が上手でそんな事故にすごく準備できるね」と思いました。家に戻ってきてテレビで聞くことはありえないと思いました。

ポーランド国はまだ表向きの救済がないけれども日本学科の学生が千羽鶴を送ろうと思っています。

赤十字の救済があるとぜったいに必要な物を伝えます。そのときまでにしっかりして下さい。頑張って下さい!!!

訃　報

２０１１年７月、牧　吉子様が急逝されました。
牧様は日ポ・サロン創立に奔走され、２００３、２００４年は理事長として大きなお力を出して下さいました。
年賀状にはいつも世界の平和への願いを書かれておられたことが心に残っています。
心よりご冥福をお祈り致します。

牧　吉子様の遺稿

「日ポ・サロン」

１９９８年秋、大阪府病院協会のツアーでポーランドを訪れた。旅行も終わりに近い日、郊外のジェラ・ゾヴァ・ヴォラにあるショパンの生家で、ピヨトル・クラインのピアノ演奏を聴いた。あまりに素晴らしいので、「日本に来て下さい」と声をかけると、来年３月に北海道へ行くとのこと。では大阪へも足を延ばして下さいと誘い、幸いお世話をして下さる方があり、急きょ扇町にあるプライベートホールとモーツアルトサロンでコンサートを開くことになった。大阪のポーランド関係の主な方々に招待状を送るようにと某氏にすすめられ、在大阪名誉総領事の高島浩一氏をお招きすることに。この時、名代として出席されたのが、妹の和子さんであった。

これを機に、ポーランドとの友好を深める事になる。先の旅行に御一緒した河合さんは５年前から、支援しておられたとのことで意気投合し、「日ポ・サロン」をつくることになった。加えて、和子さんもお仲間とポーランドの勉強会を始めようと考えていたということで、共に日ポ・サロンで活動していくことに衆議一決する。ワルシャワ大学日本語学科の学生に、奨学資金を支給することがメインとなり、その資金集めにコンサートやバザーを行い、私は河合さん、和子さんと共に奔走した。

日ポ・サロンを創設した時、発会式で祝詞を頂戴した名誉総領事の高島浩一氏が翌年、御逝去され、誠に残念なことであった。妹の和子さんは２年間悩まれてたが、後継者として兄上の職責を引きつがれることになった。東京のポーランド大使館で、その就任式が行われ、私と河合さん、京都の岸本さんが式典に参加した。

こうして高島和子さんの名誉総領事としての活動が始まり、兄上の宿願であったという日本の茶室をワルシャワ大学の中に造られた。設計者、大工、建築資材を携えて当地へ赴かれたが、これは大事業であったと想像に難くない。日本語学科の学生が、ここで茶道を学び、日本からも家元が出向かれたと聞く。

一方、河合さんは、毎年１名奨学資金を受ける学生の世話を親身にされている。日ポ・サロン発足以来、こうして何らかのお世話をした学生は５０名を遥かに超えると思う。現在も１００名を超える会員の方々が協力されて、日ポ・サロンは確かな歩みを続けておられる。喜ばしい限りである。私は１０年を節目として退会。後は、お若い方々におまかせすることとした。

日ポ・サロンの今後の御発展を祈って止まない。

（牧吉子随筆集より）

関西在住日ポ・サロン後援留学生（2011年度）

マルタ　ヤクボフスカ	神戸大学国際文化学部
アドリアンナ　ヤクポルスカ	大阪大学大学院
ヤクブ　マルシャレンコ	大阪大学大学院
カタジナ　ヴィスポルスカ	神戸大学文学部大学院
マルチン　タタルチュク	京都大学文学部大学院
カロリナ　カミンスカ	同志社大学日本語科
パウリナ　ザレムスカ	同志社大学日本語科
アリシャ　ピオトコヴィツ	同志社大学日本語科
アンナ　ヴィエジュビッカ	神戸大学国際文化学部
アガタ　ヴェルボウスカ	神戸大学経済学部

編集後記

２０１１年は東日本大震災、十津川水害と災害が続き、私たちの出来る事は何でもしなければと思わされました。

ワルシャワ大学日本語学科からは震災後すぐに行動され、先生方、学生さん５６人もが心合わせて折られた千羽鶴や励ましのメッセージが届き、ショパンのＣＤ“がんばれ日本”販売時には、皆様から寄付も頂き、ご協力有難うございます。

これまで神戸大学留学生担当でお世話下さっていました影山教授が退官なさることになり、先日、後任の寺内教授にお目にかかりました。その折に５年前から神戸大学からもワルシャワ大学にのべ８人もの学生が留学出来、喜んでいますとお聞きしました。私たちが願っていました日本とポーランドの学生の交換留学が実現している事を知って大変嬉しく思います。

これは会員お一人お一人のご支援のお陰と皆様に感謝申し上げます。

これからも日ポ・サロンの活動のご希望、ご意見、会報への投稿をお寄せ下さい。（岸本記）